

## 紫式部と雪の夜

土田龍太郎

源氏物語の内に朝顔と聞ゆるは、桐壺帝の御弟桃園式部卿宮の息女にて、一たび賀茂齋院に立ちたまひしかども、御父式部卿宮かくれたまひしをり賀茂よりやがて退下あり、おりるの後は、もはら桃園宮にて月日を送りたまひしなり。

従妹なるこの姫に源氏のはじめての言ひかけしは、いまだいと若かりしころなること、帚木卷の内、かの雨夜の品定の名を得たるところによりてぞ知るをうべき。この夜、源氏さまさまの物語ありしついでに、式部卿宮の姫に朝顔の歌詠みまゐらせしことにも言ひ及びたり。

さはれ源氏と朝顔の前齋院のあひかかはれるさまをつぶさに語れるは、薄雲卷にただに續ける朝顔卷にほかならで、この卷によるに、薄雲女院かくれたまひてほどなく、桃園式部卿もまたままかりたまひぬれば、前齋院やがて桃園宮に移りたまひし後、源氏しきりにかの宮を訪ひつつ姫にしふねきまでもの云ひかけせちにかきくどきてやまざりしなり。かかるをり、姫宮の源氏にあへしらふことさすがなかりしにてもあらず、歌詠みかはすほどまではありしかども、姫の男にうちとけたまふけしきつゆばかりだにあらざりければ、あいなきこといはむかたなかりけり。

光源氏の一期によばひわたれる女、貴き賤しきいとあまたにて數ふるにいとまなきはいふもさらなれど、かかる源氏の妻問ひにつひになびかでやみにしは、この前齋院をおきてほかにまたありたりとも思はれず。げにこの姫君あやしく稀有なりと云はでやはあるべき。この宮の落飾ありしこと、若菜卷に記せれば、やもめのままにて世を終へたまひしにまぎれなきなり。かくたぐひなきまでみさを固くして、世のなべての女の戀ひ慕はではあるまじき雅び男なる光源氏を拒みおほせたるはそもいかなるゆゑならむ、いともゆかしきことこよなし。

この姫宮につきて考へまほしきことのくさぐさ、ここにさながら論はむもよしなれば、そはしばらくせでもありなむとて思ひとちめむほかなきぞくやしき。

前齋院のことはともかくもあれ、朝顔卷を繙くにせちに心ひかるるは、源氏の住ひせる六條院の夜の雪景色を敍ぶるところにてぞある。朝顔宮にいかにももの言ひかくれども、

この宮いともつれなくもてはなれたるままなれば、源氏つひにせむかたなきままにやみぬるさまつばらに語りて後、同じ巻の奥にて、庭に積もれる雪を見やりつつかたはらに臥したまへる紫上に、昔今のあれこれのこと、夜のふけゆくままに語り聞かするところあり。ここに一年かの藤壺中宮の御前に雪の山作らせたりしことより説きおこして、同じ女院さらに朧月夜内侍花散里前齋院のけはひ心ばへとりどりにいみじくなつかしきこと問はるともなく、思ひ出づるにかませてそぞろに語りゆくことどもいづれもさもありぬべく聞ゆれば、讀むにいとどあはれぞそへまさる。

このときの庭の景色のめでたきことよなし。すでにいたく積りたるその上にさらに雪の散りかかりつつ、松も竹もおのがじしきはだちて、人の姿と形とつねよりもなほ光まさりて見えたり。

ここに源氏かかる冬の夜の雪景色のいみじきにえたへぬあまりに左のごとく獨りごちたり。

時々につけても人の心をうつすめる花紅葉のさかりよりも、冬の夜のすめる月に雲の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものの、身にしみてこの世の外のことまで思ひながされ、おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ。すさまじきためしに云ひおきけん人の心あささよ。

と云へる獨りごとを

とて御簾巻きあげさせたまふ。

とどめたる草子地、ただに續けて庭のありさまをさらに左のごとくに敍べたり。

月はくまなくさし出でてひとつ色に見えわたされたるに、しだれたつ前栽のかげ心ぐるしう、やり水もいといたうむせびて池の水もえもいはずすぎきに、童おろして雪まろばしせさせたまふ。

おほかた世に雪好むものの少からぬはさることなれども、花の春紅葉の秋よりもましてなほ色も香もなき雪の冬をめづるものとはたえてなきにしもこそあらざるめれ、さしも多しとははた思はれず。されば、冬の夜をすさまじきためしに云ひおきけむ人の心あささよと源氏のそしれるはことわりなきにあらざるべし。

かの清少納言、雪の冬を好まざりしにてはつゆあらで、枕草子にても雪のことこかしこに記せり。例へばある年の師走の十日過ぎしころ雪のいみじく降りたれば、中宮の仰せ

にて侍に主殿寮とのもれちの官人などしていと高き雪の山作らせしときのこと、なほ消えやらで後まで残りしその山のことなどさまざまに敍べていともねもころなり。ほかに

いと高うはあらでうすらかに降りたるなどいとこそをかしけれ。

と記せるところあり。また日ごろ降りつる雪の白く残りてくまなき有明の月の光に照りはゆるさまのえもいはずめでたきを述ぶるところあり。さらに雪降るときの人々の装束ことにきはだちて見ゆることのいとをかしきを云へるところさへありて、げに清少納言の雪をめづる言の葉さまざまにて、いづれおもしろきはさることなれども、そぞろさえかへる冬げしきのさ中にありて、この少納言のことに心ひかれしは、雪の白きに隣れる物と人の色と形のけぢめつねよりもなほけぎやかにきはだてるさまにほかなきなり。かく冬の日の物のきはだてるさまをとらふる眼まなしのとくさときこと、この少納言にえ及ぶものとは見出しがたかるべし。

枕草子のかかるおもむき、源氏物語にはさらにゆかりなしとはえしも云ふまじけれども、紫式部の雪によする思ひの、清少納言といたく異なるさまをまがふかたなく知らしむるは、先に朝顔卷より引たる源氏の獨りごとにはかならず。ことになほざりに見すぐすまじきは、月の光にあやしきまでにさえわたれる雪の空を見やりて、この世の外のことと思ひながさると云へるところにて、げにここに一期のはてになほはれやらぬままに残れる紫式部のやる方もなきうき思ひのさりげなくこめられたりとおぼゆれば、かしこくあはれなることたとしへなし。

雪の月夜をながめやれば、あやしくものぐるほしき心地さへそひて、思ひ亂るるわが心、はてしもなきさかひにうたあくがれゆきてとりとむる方ぞなき。このかそけくはるかなるさかひ、幽玄境ともや云ひつべかるめれど、紫式部の思ひやるかかるゆゆしきさかひに至らむこと、清少納言には望むべしともおもほえず。

かく云ふは、紫式部と清少納言の優り劣りを論あげつらはむとにはあらず。おのおのに生れつきたる心の性さがのあひ異なるをこそ云はまほしきなれ。雪景色にあひて、少納言はまづ物の色と形に心をとめ、式部は、色形をめでざるにてはなけれども、まぢかに見ゆるものを超えたるはるけき方におのづと思ひ寄らではあらざるなり。いづれの年なりけむ、初雪降りたるある夕暮に、人の詠みおこせたる歌の返し、紫式部家集に載りたり。

ふればかくうきのみまさる世を知らで

荒れたる庭につもる初雪

積れる雪を見るにつれてうき思ひのいとどつりくることを詠めるこの一首、朝顔卷の源氏の獨りことにもあひかよへるおもむきありて、式部の心のさがくまもなく知らしむるにたれり。

源氏物語にて雪の夜のゆゆしきを述ぶるところ、朝顔卷に限れりしにてもあらず。宇治八宮の上の御娘みむすめ失せたまひし後、雪のかきくらし降りし夜、宇治に留まれる薫大將、その大君を偲びてすだれを巻き上げて、つくづくとながめしことあり。このところ總角卷あげまきにては、左のごとくに敘べたり。

かがみと見ゆる汀の水、月かげにいとおもしろし。京の家のかぎりなくとみがく

も、えかうはあらぬはやとおぼゆ。わづかに生き出でてものしたまはしかばもろとも聞えまほしと思ひつづくるぞ胸よりあまる心ちする。

わづかに生き出でてとは、今は世になき大君のなほ世にあらましかばの心を云ひ、都の家とは薫の日ごろ住みなせる三條院をさせるなるべし。

これに續けて中君と匂宮のことなど語りて後、同じ卷の内にて、再び薫大將の雪景色をながむるさまを述べたり。

年の暮れ方にはかからぬところだに空の景色例には似ぬを、荒れぬ日なく降り積む雪に、うちながめつつ明し暮したまふ心ちつきせず夢のやうなり。

夢のやうなりとは、この世の外に誘いざなはるるやうなる心ちを云へりとせば、これまた朝顔卷の源氏の獨りごとにかよひてぞ聞ゆるなる。

夜の雪を見やりしままに、光源氏の口よりふと出でし言の葉、紫式部のそこひもなく深き心の奥をおのづから伺はしむるよすがとなれるは、げに思ひのほかなりともや云ふべからむ。おもしろきことよなきなり。

(令和五年八月二十八日受附)